Mar. 2015

People, Cinema, Stage, Takarazuka, Art, Craft, Book, Comic, NewOpen

ÉCOLE de FUJINGAHO

あなたの好奇心と知性を磨く専門学校「エコール・ド・婦人画報」。各界著名人が講師としてご登壇!

辛酸なめ子 この人を深掘り! 26

作家 田中康夫さん

Profile　たなかやすお●1956年東京生まれ。'80年、『なんとなく、クリスタル』で「文藝賞」を受賞し文壇デビュー。2000年から6年間、長野県知事。2012年まで衆参両議員。著書に『昔みたい』『たまらなく、アーベイン』『神戸震災日記』『憂国呆談』など。http://www.nippon-dream.com/

一橋大学在学中に書いた『なんとなく、クリスタル』がベストセラーになり、一躍スター文化人に。長野県知事や国会議員を務めたあと、2年前の総選挙で敗退。時間の余裕ができたところで『33年後のなんとなく、クリスタル』を執筆。

前作同様、注釈も充実し、小説としてだけでなく、グルメ本、恋愛指南書、政治活動レポート、注釈で答え合わせするクイズなど、何通りもの読み方ができる大作です。「文芸書というだけでなく、人文科学とか社会科学、マーケティング本

この人の仕事

『33年後のなんとなく、クリスタル』
(河出書房新社　1,600円)

高度消費社会と少子高齢化を予見した小説『なんとなくクリスタル』から33年。当時と同じ主人公たちの再会や会話を通じて、33年間で変わったもの変わらないものを描き出す。70ページを超える膨大な注釈はさまざまな分野で資料価値をもつデータとしても評価される。

33年後の「なんクリ」たちの柔軟さは強さでもあります

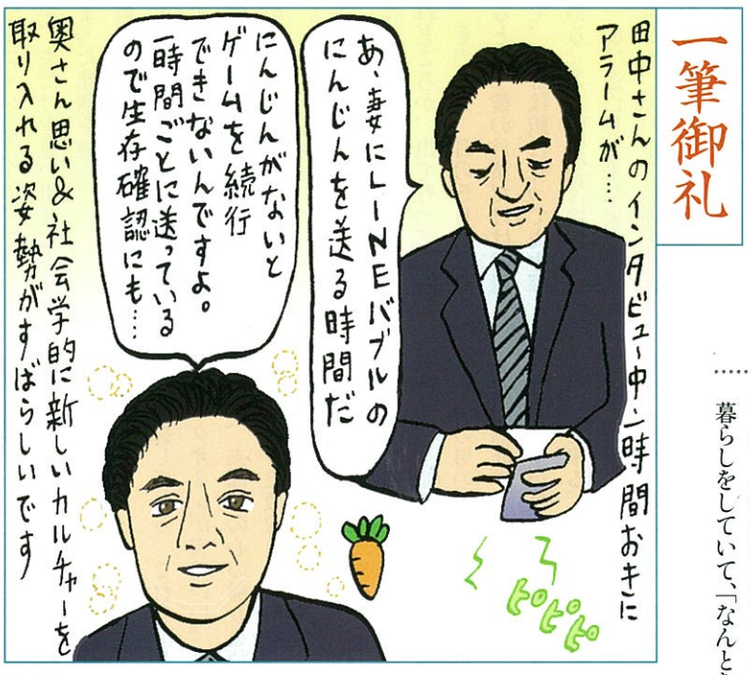
文・イラスト＝辛酸なめ子　撮影＝宇壽山貴久子

といえるのかもしれないし、流通論と呼んでもよいのかもしれない。特定の範疇に閉じこめにくい本かもしれないですね」と、田中氏。丁寧で柔らかな口調からは、元政治家の威圧感は感じられず、クリスタルのように瞳が澄んでいるのが印象的です。

主人公は政治家のヤスオ（と、呼び捨てにしてもよいのでしょうか）。愛犬ロッタを散歩中、かつての女友達江美子と遭遇したのを機に、女子会に呼ばれたり、『なんクリ』主人公の由利ともつながったりします。現実にありそうな自然な流れで、思わず登場人物を名前で検索してしまったほど。「フィクションでありノンフィクション、ノンフィクションでありフィクションなので」と田中氏はおっしゃいますが、女子会での会話もリアルです。おいしい料理について語りながらも、話題は、都内の独居シニアの多さや、「いちば」と「しじょう」の違い、子宮頸がんワクチンの是非について発展。

「自然体という言葉とも違って、ごく普通にパスタの味わいと同じように自分たちの体のことも世の中のことも語れるというのが女性ならではだと僕は思うんですね。男たちの、マルかバツか、正しいか正しくないかという判断基準とは違う。女性はやっぱり好きか嫌いか、心地よいかどうか、そういう数字に換算できない感覚で語るでしょう。今の金融資本主義では、数字に換算できないものは価値がゼロという風潮になってしまっている。でも家族や地域の温かさや、文化や伝統など数字に置き換えられないものこそ大切なもの。

一筆御礼



Profile
しんさんなめこ●1974年東京都生まれ。漫画家、コラムニスト。巫女的な感性であらゆる事象を取材しまくる驚異のフィールドワーカーとして知られる。近著に『霊的探訪 スピリチュアル・レッスン』『セレブの黙示録』、近著は『絶対霊度』(学研)、『なめ単』(朝日新聞出版)など。

て。今回は片仮名のヤスオという人が語り手ですけれども、僕は女性の登場人物の気持ちを書くほうが書きやすいんです」

それにしても登場人物の50代の女性たちは皆素敵な大人になって良い暮らしをしていて、「なんとなく気分だと思います」

女子会での感覚的な会話は、難しい政治の話題でも不思議とすっと入ってきます。

「リアルな会話だと言われますが、別に女子会にテープレコーダーを仕掛けて録音したわけでも何でもなく

のよいものを、買ったり、着たり、食べたりする」、『なんとなく、クリスタル』の生き方が間違っていなかったことを感じさせます。上質なものに囲まれることで運気を高めていったような……。

「でも、傍目にはとても順調にいっているように思えている人だって、いろいろなことを経験しているんでしょう」

33年間、キャリアを通して自分を見つめてきた由利も「微力だけど無力じゃない」という言葉を胸に、南アフリカでの社会貢献を決意します。消費活動とボランティアでバランスを取るという女性の生き方を提示されたようでハッとします。

そして33年後の田中康夫氏自身は、本のカバーにも写真が載っている愛犬ロッタ（4歳・女の子）一筋だとか。具合が悪そうだと夜中でも病院に連れて行ったり、東京ミッドタウンのしつけ教室の送り迎えも自ら行うほどの溺愛ぶりです。

「ロッタは、自分も人間だと思ってる知能犯（苦笑）。妻や僕をよく観察していて、思いきり甘えたり、ツンデレだったり」と、魔性の犬のよう。「両性具有」（ご本人談）かのように女性的に女性の気持ちを知り尽くした百戦錬磨の田中さんだから手なづけられる犬だと感じ入りました。